

The "Mat Plants" as a new greening material

Itoh Takeyasu
Urban-Landscape Material Association

1. 景観材料推進協議会の紹介

景観材料推進協議会は社団法人日本建材・住宅設備産業協会の姉妹団体で景観材料に関係するメーカーが集まって出来た団体で、本年度で設立 15 周年を迎える。

4 つの委員会が設置され、その一つが調査委員会であり、この委員会のなかにマット植物勉強会を昨年末に発足させた。

今まで、緑を扱うことが無かった会員が多かったが、(社)日本植木協会から「新しい緑化材料であるマット植物」について共同事業の提案があり実現したものである。従来の景観材料に緑を結びつけた新しい商品が出来ればと考えている。

このマット植物勉強会は、日本におけるマット植物研究の第 1 人者である千葉県農業総合研究センター首席研究員の柴田忠裕氏を主査に招聘し、コンテナ栽培植物の生産団体である(社)日本植木協会・コンテナ部会とメンバー企業 11 社で構成されている。

2. マット植物の紹介

マット植物は、まだ一部の業者および農家が生産を始めた段階の、日本では新しい緑化材料である。緑化先進国であるドイツの緑化事情を紹介するなかで、このマット植物が日本でどう期待されるかについて紹介する。

マット植物とは、「根域を(厚さ 4cm 以下)に薄層化し、根が互いに絡み合いマット状になった植物」のことで、日本では新しい緑化材料の一つである。芝生のように張り付けるだけで完成型の緑化が可能である。コンクリート面の上でも、置いて、給水するだけでよく、盆栽感覚の緑化が完成する。

3. 先進国ドイツの屋上緑化事情³⁾

先進国ドイツでの屋上緑化は大きく分けて粗放型と集約型の 2 つがある。歴史的には、1970 年ごろにまず粗放型緑化が始まり、近年になって高層階や地下に集約的手法による庭園や緑地・公園をつくるようになった。ドイツでは前者が 90%、後者が 10%と圧倒的に粗放型緑化が多い。これが日本だと全く逆で、集約的緑化が大多数である。

粗放型緑化とは、基本的には自然に近い形で栽培され、ほとんど手を掛けなくて維持・管理するもので、低コスト化が可能である。現在では北欧から南

欧にまで広範囲に普及している。地域によって気候条件に合わせる必要があり、寒くて雨量の多いところでは迅速な排水が重要であり、逆に雨量少ない地中海地方では植物のための水分貯留技術や乾燥に強い植物の洗濯が必要である。

粗放型緑化では、基層の厚さを 2 から 6cm にする薄層緑化が標準で、10cm 以上だと飛来した雑草が生える。中部ヨーロッパでは苔、セダム類を用いた 2 ~4cm の薄層緑化が一般的である。

粗放型緑化では最初の段階で一度灌水するがその後は人工的な灌水は行わない。使われるセダム類も南イタリアと北欧とでは種類が異なる。最近では、日本でもこの苔やセダム類が屋上緑化に多用されている。

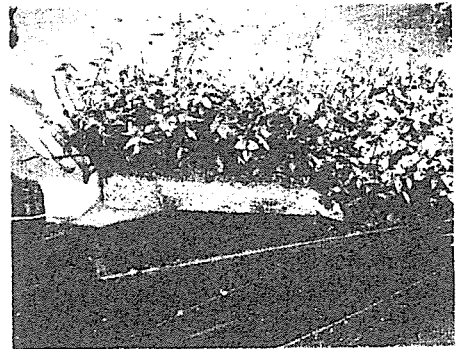


写真 1. 育成トレイとツルマサキ

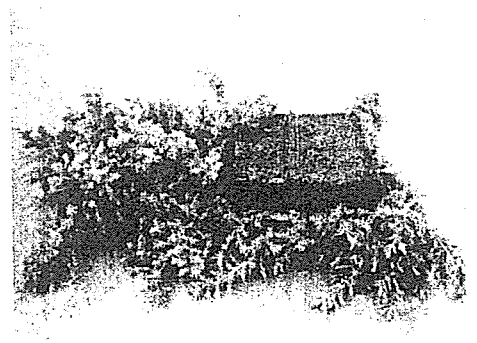


写真 2. 6年間栽培したハイネズ